

Sophia-R

Sophia University Repository for Academic Resources

Title	BBCワールド・サービス : こちらはロンドン
Author(s)	原, 麻里子
Journal	ソフィア : 西洋文化ならびに東西文化交流の研究
Issue Date	2006-06-30
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000002617
Rights	



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

BBCワールド・サービス — こちらはロンドン

原 麻里子

BBCワールド・サービスは英国の誇り

BBC (British Broadcasting Corporation 英国放送協会) は世界で最も有名な文化機関の一つであり、ジャーナリズム・放送・オンラインサービスの質のよさでよく知られている。BBCは八十年の歴史を通して、批判を受け、論争に巻き込まれ、政治的にも難しい立場に置かれてきたが、世界の公共放送のモデルであり続けている。

英国人はBBCをかなり誇りに思っている。二〇〇〇年五月、英国政府の国際貿易推進機関が発表した調査結果によれば、四〇パーセントが英国の最高の輸出品はBBCであると答えたという。ちなみに第二位にはビールと王室が並び、第四位がシェイクスピアである。¹⁾

しかし英国外で、BBCの「不偏不党」「客観的」で正確な報道という名声を築くことにおいて、大きな役割を果たしてきたのは、「こちらはロンドン」(This is London)、「ロンドンの声」(London Calling)で知られるBBCワールド・サービス(国際ラジオ放送)である。というのも、BBCニュースの世界的評価は高いが、九〇年代までは、英国

以外ではそれをテレビで見ることが出来なかったのである。

一九八八年三月末から一九九一年三月末まで、私は、当時在籍していた在京テレビ局から、BBCワールド・サービスへ派遣され、日本語部のプロデューサーとして勤務した。一九九一年三月末をもってBBC日本語放送は終了したので、私は最後のスタッフの一人である。この間には天安門事件、東欧の共産主義政権崩壊、湾岸戦争という世界を震撼させる事件が続いた。

私はBBC赴任中、「英国には、世界に誇れるものが三つある。それは、英語、オックスブリッジ（オックスフォード大学・ケンブリッジ大学、BBCワールド・サービスである）」と、繰り返し耳にした。また一九九九年には、BCW（ワシントン新支局のオープニングで、コフィー・アナン国連事務総長は、「BBCワールド・サービスは、恐らく、今世紀（二十世紀）における英国の世界に対する最高の贈物」と語った。²⁾

さらに二〇〇五年、BBCのマイケル・グレイド会長は、「BBCワールド・サービスは抜群の評価を得ており、BBCの地球上の地位の柱石である。さらにワールド・サービスは、英国に対する評価と尊敬を獲得することで、英国に多大なる利益を与え続けている」と語っている。³⁾

本稿ではいかにしてBBCワールド・サービスは成功を収めてきたのか、今後はどのように、「国際公共放送局を目指す」（グレイド会長）のかを、私の経験や見聞も織り交ぜながら考えてみたい。

BBCの誕生

一九二二年、現BBCの前身である British Broadcasting Company（英国放送会社）は株式会社として誕生した。通信省が集める受信許可料を財源とし、政府や広告収入に財源を頼らないことになった。そして編集方針は独立を維持するとされた。三十三歳の若き総支配人ジョン・チャールズ・ウォルサム・リースは、BBCを、ソビエトの国家統

制下にある硬直した放送局と、アメリカの超商業主義的ラジオ局の中間にあたるような放送会社しようとした。一九二七年、BBCは公的法人の British Broadcasting Corporation (英国放送協会) となり、リースがその初代会長に就任する。BBCはその目的、権限、任務を定めてある国王の第一次特許状を得た。⁽⁴⁾一九三八年、BBCは、英国人口の九八パーセントが受信するメディアに成長している。

当初、民間会社として設立されたBBCであるが、リースの性格がBBCの性格をかなり規定することになった。⁽⁵⁾一八八九年、リースはスコットランド東海岸の小さな町で長老派教会の牧師の家に生まれ、厳しいカルバン派の教育を受けた敬虔なクリスチャンであった。グラスゴウの王立工芸専門学校を卒業した彼は、エスタブリッシュメントの出身ではなかった。リースは自分の仕事について道徳主義的・権威主義的で、明らかにユーモアに欠けていた。⁽⁶⁾彼は放送を神の目的にかなう道具にしようとして決意する。放送は貴重な国民的資源である。それは単なる娯楽の手段ではなく、国民を教育し、啓蒙するために天が与えた機会である。放送事業は営利からは離れて、文化的・道徳的使命を担う国民への奉仕事業、つまり、公共サービスであるべきだと考えたのである。⁽⁷⁾

一九三〇年代、BBCは一種の「ナショナル・チャーチ」(国民の教会)であり、「プロデューサーは僧侶で、彼自身は枢機卿が教皇、時には、救世主である」と、リースは考えていたという。⁽⁸⁾リースは「独占という乱暴な手段で英国人にキリスト教の道徳を刻印したのである」⁽⁹⁾。今でも英国人の間では、BBCは修道院・英国国教会というイメージがあるし、⁽¹⁰⁾彼による公共放送の定義は力を持ち続けている。⁽¹¹⁾リースは卿(ロード)の称号を獲得し、BBCの会長退任後、大臣も歴任した。また興味深いことに、二代目会長のオウゲルビーもスコットランドの牧師の子であった。

公共放送としてのBBCの確立

一九二六年、炭鉱の労使紛争が国家対労働組合の全面対決に発達し、全国で二百七十五万人がストに参加した。こ

のとき、チャーチル蔵相はBBCを国営化し、国の広報機関としてストライキの収拾に使おうとした。しかし、リースはBBCの独立の必要性を主張し、これを阻止する。BBCはゼネストの報道を通じて国民の信頼を得て、権威を増していく。リースは信頼は「信頼すべき不偏不党なニュース」によって得られると主張した⁽¹²⁾。BBCがどの程度、不偏不党であったのかについては論議がある⁽¹³⁾。シートンは、ゼネストの効果は、BBCが「信頼すべき不偏不党な情報」の提供によって信頼を獲得するという英国型の現代的プロパガンダを創造したことという⁽¹⁴⁾。

第二次世界大戦を迎え、政府はBBCを国営化し、情報省の直属機関にしようとした。しかし議会内でも、BBCの独立を守るべきだという意見が強かった。検閲は行われていたが、BBCが国民をまとめ、国内の士気を上げたのは事実である。

戦後は、一九五六年のスエズ危機の際に、政府はBBCに対し海外放送への助成金（全額国費）の懲罰的な削減まで持ち出して強い圧力をかけてきた。そしてサッチャー政権による民営化の危機と、BBCは国営化・民営化の危機を何回も乗り越えてきた。また最近では、アンドリュー・ギリガン記者のイラク報道をめぐるBBCと政府との対立（ハットン報告書は、ギリガン記者のイラク報道を事実無根と結論つけた）も、BBCの独立を印象つけた⁽¹⁵⁾。

BBCは偉大なる国民の組織であり、外部からの政治的圧力を歓迎しないと、しばしば言われる⁽¹⁶⁾。しかしクリセルによれば、BBCは編集方針は独立しているとはいえず、決して政府から完璧に独立であったとはいえないという。BBCは王室特許状による保障、国による経営委員などの使命と受信許可料の決定がなされるので、BBCと国家の関係は繊細であるし、時には緊張状態になるといえる⁽¹⁶⁾。さらにマレーイは、BBCは英国の組織であり、公的サービスを促進するためのものである点から、政治的圧力のみならず、国民のために国家に奉仕するということもある。外部からの圧力に屈しないという主張は単純すぎると批判するのである⁽¹⁷⁾。

BBCワールド・サービス

海外放送の誕生

一九三二年十二月、BBCは英国本土と海外の自治領、植民地を結ぶエンパイア・サービス（帝国放送）を開始し、この海外放送が多言語による世界放送になった。一方一九三五年、イタリアはエチオピア侵略正当化のため、パレスチナやエジプトなど英国の権益が大きい中近東地方に向けてアラビア語放送を開始した。一九三八年からは、ドイツもラジオ放送による猛烈なプロパガンダを始めた。

一九三八年一月、戦争勃発が切迫したなか、英国はこうした枢軸国ラジオ放送によるプロパガンダに対抗するため、中東向けのアラビア語放送を開始する。当初、外務省は、中東向けのニュース項目は英国に有利なものだけを放送しようと考えていた。しかしリースは直ちに猛反対し、「BBCは国内放送と等しく、アラビア語放送でも政府の支配から独立していなければならない。真実に満ち、包容力のある放送のみが権威を持つ」と主張した。⁽¹⁸⁾九月、欧州向けの仏、独、伊語放送が開始された。開戦時には七言語（アラビア、フランス、ドイツ、イタリア、アフリカ、スペイン、ポルトガル）だけで放送されていたが、次々に様々な言語による放送が始まり、一九四三年七月には、日本語放送も開始された。戦争終了時には、全世界に向けて四十五言語で放送していた。

戦争以前は、国際放送の費用は受信許可料から払われていたが、戦争が始まると、議会の承認を得て、外務省から助成金が出るようになり、それが今に至る。また一九四一年三月には、その前年に、BBCの放送センターが爆撃されたため、まず欧州放送局がブッシュ・ハウスに移る。その後、各言語部が同所に移動し、現在もワールド・サービスのロンドン本部はここにある。そのため、ワールド・サービスはブッシュ・ハウスとも呼ばれている。

レジスタンスのシンボルBBC

一九四〇年六月のパリの陥落後、英国は完全に孤立し、枢軸国に対抗する唯一の国ともいえた。ロンドンには、ノルウェー、ベルギー、オランダ、ポーランド、チェコスロバキア、ユーゴスラビアの亡命政権が置かれ、またフランスのドゴール將軍の自由フランスの本部もあった。その結果英国は、枢軸国の占領下にあった人々にとって、レジスタンスのシンボルとなった。ナチス占領下の欧州では、BBC放送は「ロンドンの声」、国の声、希望と勇気の源として、レジスタンス運動を積極的に支援した。したがって、レジスタンス最大のシンボルがBBCの声であった。⁽¹⁹⁾

また一九四二年からは、早朝に英、仏、独語のニュースをモールス信号で三十分間送り、ナチス占領下の欧州諸国で発行され始めた秘密新聞に情報を提供した。一九四四年にはこれがモールス信号から音声に代わっている。⁽²⁰⁾ BBCの欧州放送は、欧州では信頼できる唯一の情報源であった。デンマークのナチス系新聞 (*Fædrelandet*) は、「多くの人々はロンドンからの臨時ニュースを聖書の言葉より信じている」と伝えたほどである。⁽²¹⁾

ドイツはBBC放送に妨害電波を流した。ジャミングである。またフランスのビシー政権やイタリア当局は、BBCを聴いている人に罰金を課し、ナチス占領下にあるすべての国で、ラジオは没収された。フランスとポーランドでは、投獄・追放、処刑も行われたが、最後には、ドイツはBBC放送の受信禁止を諦めた。戦争が終わり、郵便が回復すると、ブッシュ・ハウスには全欧州から礼状が届いたという。フランスからだけでも最初の月に四千通、ドイツからも数千通届いた。⁽²²⁾

日本語放送

一九四三年七月四日に、日本語放送が始まった。BBCによれば、日本語放送を聞いたのは軍関係者を除いては、

日本全国で百人以下であろうと推測している。⁽²³⁾ 戦時中、東京の自由ヶ丘で、高齢の引退した海軍の将官が押入れの中で、自分で組み立てたラジオでBBC放送を受信し、民間人も集まって、その放送を聴いていたという。私の祖父も元将官宅が自宅から徒歩の距離にあるため、時折お宅へ出かけては、BBC放送を聴いていた。スパイとして捕らえられるのではないかという家族の心配に、祖父は元将官の名前を明かすことはなかったが、この元将官は英国に暮らしたことがある人で、摘発されても大丈夫というほどの人だと話していたという。そして帰宅後、祖父は、「放送内容は大本営発表とはずいぶん異なる。日本は負けている」と家族に話していたそうだ。こうしたBBCの情報によって、家族は疎開することになった。戦時中の日本でも、BBC放送は少しは、その働きをしていたといえる。

戦争中の検閲

第二次大戦下のBBC海外放送も情報省の厳しい監督下に置かれていた。ジョージ・オーウェルは、一九四一年八月から四三年十一月まで、BBC東洋部インド課のトーク番組プロデューサーであった。オーウェルの『一九八四年』に描かれた全体主義的雰囲気（現在のみならず、過去も改変し、さらには人間の心までも改変しようとする、社会全般にわたる検閲の雰囲気）は、オーウェルの情報省の手に握られたBBCの検閲を体験した結果、それを風刺的に書いたとされている。⁽²⁴⁾

ポーンは、BBCが見せた最高のプロパガンダ術は戦時中の海外放送にあるという。⁽²⁵⁾ トルコは中立国であったが、トルコ語部内と政策助言者と情報省との間のメモが「真実」をどのように報道するかを伝えている。それによれば、あらゆる機会を捉えて、トルコの友好的かつ中立的立場は重要であり、英国は「人道的な」国であると伝えるという。⁽²⁶⁾ このメモには、BBCは不偏不党の真実を報道しているという見かけを維持するための注意や、興味深い軍事的政治的目的の取材報道も記され、BBCと国家は協力していたことが見てとれる。⁽²⁷⁾

各言語放送と検閲の間には様々な問題があったが、各番組の責任を負う英国人スタッフが放送のスイッチを切らなければならぬ、つまり、放送を中断しなければならぬということにはなかった。

戦後のBBCワールド・サービス

戦後の発展

一九四八年、エンパイア・サービスはエクスターナル・サービス（海外放送）と名称を変え、政府の方針と国民経済を反映するようになる。一九五〇年代は縮小、一九六〇年代は拡張、一九七三年のオイル・ショック以降は削減という経緯をたどったが、一九九〇年代に入り、ワールド・サービスという名称になる。二〇〇六年初めまで、ワールド・サービスは、英語以外にも四十二言語で放送し、世界中で毎週一億五千万人の聴取者がこれを聴いていた。しかし二〇〇六年三月末までに、アラビア語テレビ放送開始費用捻出のため、十言語を閉鎖し、二〇〇六年四月以降は、三十二言語で放送している。⁽²⁹⁾

戦後もBBCの国際放送は、報道の正確さ、独立性、不偏不党、番組の質の高さで信頼され、世界の国際放送の中では、最も高い評価を受けてきた。聴取者は、ワールド・サービスは英国政府の助成金によって運営されていても、その編集方針は非常に独立していると信じている。しかし国際ラジオ放送が外交と密接な関係があることは否めない。⁽³⁰⁾だが、アフガン戦争、イラク戦争に関する、米ネットワークテレビの「愛国的」報道と好対照を見せたBBCの報道が、世界でのBBCの評価を高めることになり、ワールド・サービスの評価も高まることになる。

一九九一年、湾岸戦争の際、私はBBCに勤務していた。当時、アラビア語部は日本語部の一階下にあったが、部の入口の扉は閉められて警備員に守られ、ブッシュ・ハウス内の者でも、部外者は自由に立ち入りしにくい雰囲気

なっていた。当然、アラビア語部スタッフの精神的重圧は大きかった。

サウジアラビア人と出国したクウェート人は、BBC放送を聴くために競って短波ラジオを買い求めていた。アラビア語放送は、『ガルフ（湾岸）リンク』という番組で、クウェートとイラクを出国できない家族と友人たちへのメッセージをリレーした。⁽³¹⁾一九九〇年九月から十二月までに、六千のメッセージが放送された。⁽³²⁾ところがアラビア語放送の湾岸戦争関連報道はイラク寄りであると批判され、当時のアラビア語部長サム・ヤンガーは独自調査を行い、独立したアラビア語を話す人に番組のモニターを依頼した。⁽³³⁾しかし政府はBBCに対し、スエズ危機の時のような強い圧力をかけてはこなかった。

BBC放送の情報に助けられた大物政治家もいる。一九九一年八月、ソビエト連邦のゴルバチョフ大統領がクリミア滞在中に、モスクワで保守派のクーデターが発生した。軟禁状態の大統領は、地下室で発見したラジオで、BBC放送を聴き、事態を正確に把握出来たという。クーデター失敗のあとモスクワに戻った大統領は、「BBCはすべてを知っている」と記者会見で冗談を言い、⁽³⁴⁾BBCの報道に感謝の言葉を述べた。BBCはこのクーデターに関する一連の報道で、この年のイタリア賞大統領賞を受賞し、当時のメージャー首相からも、報道の迅速さと有効さを賞賛する手紙を受け取った。

一方、ブルンジでは一九九三年に内戦が勃発し、混乱が続いていた。同国向けのキルンジ語放送が、内戦終結、和平へのプロセスや和平案を、地元の言葉で伝えることで、ブルンジの市民社会がそのプロセスに関われるようになっていく。⁽³⁵⁾二〇〇〇年に締結されたアルーシャ和平合意により、二〇〇一年暫定政権成立。二〇〇五年八月、選挙の結果、シタルンジザ大統領が就任した。

さらに、アメリカでの同時多発テロ事件以降、BBCはアフガニスタンとその周辺地域の言語である、アラビア、ペルシア、パシュトゥー語の放送を強化した。パシュトゥー語放送は、ソ連軍のアフガニスタン侵攻後の一九八一年

に始まった。アフガニスタンは非識字者が多く、多くの人々が困窮状態にあり、テレビを購入できない。したがってBBC放送は同国では極めて重要なメディアであり続けた。現在、十四都市で、パシトゥー語とペルシア語の番組をFMラジオで聴くことが出来る。五地方で行われた最新の調査では、六七パーセントの人がBBCを定期的に聴いており、国内ラジオを含む全放送局の中で一番高い聴取率である。⁽³⁶⁾

ジャミング（電波障害）とオンライン・ニュースへのアクセス阻止

冷戦中、一九八八年一月までの二十四年間、ソ連はロシア語放送にジャミングを行っていたが、英語放送には決してジャミングをしなかった。ソ連の政治家たちは、ラジオを外交ニュースと諜報情報関係の情報源として頼っていたからである。しかも、ソ連では英語を理解する人が少ないので、当局は英語放送を心配する必要がなかった。このため、ソ連圏の地元の言語による放送は極めて重要で、多くがジャミングされていた。⁽³⁷⁾

一九九〇年代、ビルマ、イラク、リビアも、自国民がBBC放送を聴かないようにとジャミングをした。中国語放送は今でも、時々ジャミングされている。

また、最近ではBBCのオンライン・ニュースが人気を得ている。しかし二〇〇六年一月二十四日、イラン国内のペルシア語のオンライン・ニュースBBCPersian.comへのアクセスが不能になった。また中国国内では、中国語のサイトBBCChinese.comと英語のサイトbbc.co.ukへのアクセスが不能である。⁽³⁸⁾最近、BBCは中国向けのBBCChina.com.cnを設立したが、⁽³⁹⁾には「微妙な問題」は掲載せず、英国の柔らかなニュースを掲載している。

BBCワールド・サービスの現状

ニュースルーム

ワールド・サービスのニュースルームは、BBCのテレビセンターにある、国内放送やワールド（有料の国際テレビ放送）・ニュースを統括するグローバル・ニュース・ディビジョンと連携している。ただ国内放送やワールドと異なるのは、ワールド・サービスには独自のニュースルームがあり、そこで記事を書いていることである。

一九九一年、ニュース収集部門（ニュース・ギャザリング・ディビジョン）はラジオとテレビの報道取材を中央集権化することになった。すなわち、各番組独自の編集権はなくなり、取材スタッフはニュース収集部門が決めたコンテンツで取材しなければならなくなったと、批判された。

一九九六年、ワールド・サービスはニュース収集作業の独立した編集権を削減され、中央主権化されたニュース収集部門との協同という機構改革がされることになった。ワールド・サービスの価値は、国内ニュースよりも、よりよい情報をもつ地元の情報源、大きな政治的知的独立にあるとされている。ワールド・サービスの成功はその通信員と記者のネットワーク、国際ニュース取材網に負っているが、この改革は、そのネットワークを淘汰することである。

BBCジャーナリズム内部の多様性、国際性、地元の専門家とコネクションのシンボルを犠牲にすることに⁽³⁹⁾対し、各方面から激しい非難の声が上がった。

世界にBBCの支局は四十五あるが、その中にはワールド・サービスが独自に開いた支局もあるし、また既存の支局に独自の特派員を派遣したり、通信員を常駐させたりしている。例えばウズベキスタンのタシケント支局は、ウズベク、ロシア、キルギス、カザフ語放送のニュース取材用に設置されていた。しかし二〇〇五年五月のアンディジャ

ン事件以降、現地政府からBBCの支局スタッフに対し嫌がらせや脅迫があり、同年十月末に支局は閉鎖された。

またアラビア語放送は、アラビア語を話すすべての国に特派員・通信員を置いている。閉鎖になったタイ語部も通信員二人をバンコクに常駐させていたし、カリブ海向け放送にも現地の通信員がいる。一方今でもワールド・サービスは独自の取材活動も行っている。もちろん九六年以前から、ワールド・サービスでは、BBC本体のニュース素材を利用し、特派員が取材した国際的政治家や現地の人とのインタビュー、記者のレポートも録音で登場していた。こうすることでニュースに権威と広がりを持つことが出来るからだ。

また約十年前から、各言語の英語に極めて堪能で優秀なプロデューサーは希望により、ニュースルームで英語で記事を書く研修を受けられ、研修後、ニュースルームへ移動することもある。さらにこうした記者たちが、ニュースルームの特派員・通信員・プロデューサーとして短期間、母国のみならず、その近隣諸国に派遣される。彼らは英国人特派員よりもその地域の事情に通じているので、深い取材が出来ることも多い。したがってワールド・サービスのニュースルームに関して言えば、ニュースの制作に、完璧に母国で大学教育まで受け、さらには仕事をしてきた人たちが加わっているのです。他のBBC放送よりは地域の専門性が高まりやすい。英国は「内部からコスモポリタン化した」⁽⁴⁰⁾が、ワールド・サービスも内部からコスモポリタン化しているのである。

クオアチアの新聞記者からBBCのプロデューサーに転職して二十年のジャラルコ・ボディネリックは、「ワールド・サービスは政府から距離があり独立しているので、本物のジャーナリストやBBCで働きたいと思う、非常に優秀な人たちが集まってくる。彼らは官僚や政策決定者の統制を受けずに、質の高い報道や分析した番組の制作をし、放送局としてより良く発展することにもなった」と語る。

二〇〇一年のアメリカの同時多発テロ事件以降、BBC内で後退していた国際ニュース報道、調査報道の価値と必要性が重視されるようになってきた。ワールド・サービスの貢献と、ワールド・サービスの地域特派員と専門家のネ

ットワーク、「知的で、仲介的なジャーナリズム」が突然、注目されるようになった。⁴¹ ワールド（国際テレビ放送）のニュースでも、ワールド・サービスの地域専門家がニュース解説を行っているのを見ることがある。さらにモニタリング・サービスは、世界中の約百の言語による三千以上のラジオ・テレビ・新聞・インターネット、通信社をモニターし、翻訳し続けている。これはBBCのニュース収集作業の重要な部分を占めており、英国政府や、世界中の購読契約者であるメディア、外国政府、主要な会社などへの重要な情報提供を行っているわけだ。

「プロデューサー研修——「不偏不党」と「客観性」

ワールド・サービスの各言語のプロデューサーは、日本でいえば記者・ディレクター・翻訳者・アナウンサーを兼務する。BBCスタッフがBBCの「不偏不党」「客観的」な報道を主張するときに、必ず触れるのが「テロリスト」という言葉を使わないことである。私も着任したばかりのプロデューサー研修のとき、職員向け倫理基準「プロデューサーズ・ガイドライン」を貰い、この点について研修を受けた。二〇〇五年六月、BBCは「プロデューサーズ・ガイドライン」の内容を一新し、「編集ガイドライン」を作成したが、その「テロ報道時の言語の使用に関する手引き」には、概要次のように書いてある。

BBCへの信頼は、感情的または価値判断を含む言葉の不注意な使用によって損なわれる。BBCは、他の人々の言葉を私たち自身の言葉として用いるべきではない。「テロリスト」という言葉の使用は避けようとするべきである。こうした犯人については、「爆発犯」「攻撃者」「銃を持った男」「誘拐犯」「反乱兵」「武装集団」というような言葉で伝えるべきである。また、「解放」「軍法会議」「処刑」というような言葉を、明確な法律的手続きが執られないときに使用するの、不適切でもある。BBCの責任は客観的であり続けることで、視聴者に誰が何を誰

にしたのかの評価を自分で出来るような方法で報道することである。

しかし、長年、BBCは「テロリスト」という言葉は使用しないと決めていたが、最近では事情が変わってきている。「手引き」でも、スタッフが「テロリスト」という言葉を使用すると決定したときには、BBCのガイドラインを考慮し、上級編集者に相談の上、控えめに用いるように、と書かれていた^(41b)。さらに二〇〇五年十一月に、東京で開かれた講演会で、BBCワールドのプレゼンターであるミッシェル・フセインも、「最近では、時と場合により、テロリスト」という言葉を使うこともあると述べている。マレーイはBBCは検閲組織でもあるとしながら、「テロリズムと民主主義の間に非常に明確に線が引かれたのは、BBCのお陰である」とし、「透明さと明晰さというのは英国の放送システムの主要な点である」という⁽⁴⁴⁾。

しかし英国留学中、私が「傀儡国家満洲」と論文に何気なく書いたところ、ケンブリッジ大学社会人類学科のキャロライン・ハンフリー教授に、「この傀儡国家という言葉は、政治的な意味があるので、日本の勢力が強い国家と直して下さい」と注意された。また同学科のアラン・マクファーレン教授も、ティーンエージャー向けの社会人類学の啓蒙書の中で、「自由のために戦う戦士も敵から見ればテロリスト」と記している⁽⁴⁵⁾。こうした政治的な意味合いのある言葉の使用は注意深く行うべきであり、言葉の定義には厳格にあたるべきだというのは、英国の学校教育の中で教えられている。

BBCジャーナリズムは、「不偏不党」と「客観性」というプロのジャーナリストとしての二つの倫理の上に築かれている。これらの倫理は、プロのジャーナリストの文化として義務づけられており、ジャーナリストにとつては、「修辭的な道德的合意」⁽⁴⁶⁾、「戰略的儀禮」⁽⁴⁷⁾であり続け、人々のジャーナリストに対する信頼を高めている⁽⁴⁸⁾。

BBCはオックスブリッジの園か？

BBCはエリート主義であり、オックスブリッジ（オックスフォード大学とケンブリッジ大学）出身者が多いと非難される。ニュースと時事問題番組部門はBBCのエリート・知的集団とみなされ、エグゼクティブへの出世が早い人たちとみなされている。⁽⁵⁰⁾八〇年代末、ニュース訓練計画の採用において、オックスブリッジの卒業生が好まれ、その他には、オックスブリッジ以外のエリート大学の出身者が二、三人いたのみだったという。九〇年代に入っても、ニュースルームのマネジメントは、ケンブリッジ大学歴史学部で優秀な成績を収めた人たちを多く採用したことを誇っていた。⁽⁵¹⁾

一九九一年一月、ワールド・サービスの大学新卒者「トレニー」（訓練生）の採用試験が大人気という番組を制作したことがある。例年ワールド・サービスは、何千人という応募者の中から三人採用していたが、彼らは常にオックスブリッジの卒業生であった。オックスフォード出身の時事問題（Current Affairs Talks）局の女性責任者が、その採用と教育に携わっていたが、オックスブリッジ出身者を特に優遇しているわけではないと話していた。しかし採用試験は、オックスブリッジの教育の特徴である個人指導のスーパービジョン（ケンブリッジ）やチュートリアル（オックスフォード）のために毎週平均二本の小論文を書き続けてきたオックスブリッジ生には、かなり有利であったと思われる。

その後、九〇年代半ばには試験制度や採用方針が変更したのか、訓練生に採用された三人全員がインド・パキスタン系で、非オックスブリッジ出身者というようになってきた。これは、ワールド・サービスのスタッフにも、BBCの変化を示す大きな出来事であったようである。この採用結果を知った友人の外国人プロデューサーは「BBCも変わった！」と言っていた。しかし彼も、名門校ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで修士号を取得した人である。実際、私が取材した時は、ワールド・サービス内の時事問題局で働くプロデューサーのほぼ全員がオックスブ

リッジ、特に、ケンブリッジ出身者が多かった。

二〇〇六年三月までBBC東京特派員であったジョン・ヘッドは、ケンブリッジ大学歴史学部の出身である。ヘッドは一九八五年六月から八六年三月の九カ月間、ワールド・サービスの時事問題局で訓練生として教育を受けたが、当時、BBC内で、自分がケンブリッジ出身だというと、皆に「ラッキーだね」といわれたと述べている。しかしヘッドは今でも、オックスブリッジ出身者はきわめて多いが、事情はだいぶ異なり、むしろマイノリティーの方が得たと述べている。⁽⁵²⁾

オックスブリッジ卒業生の特徴は学問的であることを尊敬することだという。⁽⁵³⁾「テロリスト」という言葉の定義にも、それは窺える。私には、BBC報道部門にはリースが残したキリスト教的倫理観とオックスブリッジの価値観・文化が強く流れているように見える。BBCの採用と昇進は、伝統的なエリートとエスタブリッシュメントのバックグラウンドを持つ人、すなわち、私営学校（インディペンデント・スクール）から最高の大学を出ている人がかなり得であると言われるが、その一方で、BBC内ではエスニックなバックグラウンドを持つ人々に対する雇用機会均等などが急激に改善されているのも事実である。⁽⁵⁵⁾

各言語放送のプロデューサーたち

私の赴任時期は東欧の共産主義政権崩壊前であったので、ワールド・サービスでは、多くの亡命者や反体制活動家・知識人が働いていた。私の知人たちを挙げてみよう。

パシュトゥー語部には、大学教授や医師もいた。この医師は元大臣の息子で、パキスタンで医学を学んでいた。ソ連軍がアフガニスタンに侵攻したとき、たまたま家にいて、危機一髪で家から逃げ出したという。逆にロシア語部には、ソ連軍兵士としてアフガニスタンに侵攻する側にいた人もいた。彼は軍役中、基地から逃れてきたといい、ソ連

には妻を残してきたと話していた。その他、ハンガリーで地下新聞を発行していたという女性教員。一九七七年、チエコスロバキアの人権抑圧に反対する運動である「憲章七七」に最年少の現役の大学生でサインし、退学処分を受け亡命、オックスフォード大学で学んだチエコ人。東欧革命後、十年ぶりに突然自宅を訪ね、母を驚かせたというハンガリー人。祭日の一日だけ国境を越えられるのを利用して、亡命してきたブルガリア人。中米で独裁政権に反対する学生運動をしていた女性。自分の出国前に、十歳の長女が乗っていたボートが難破し、娘を失ったというベトナム人元ボートピープル。元南ベトナムで新聞記者をしていたという亡命者。また、パレスチナやヨルダン川西岸出身者も多くいた。国際情勢を肌で感じられるような国の人たちである。今でも中国語部などは、自分の身元を明らかにしないように、仮称で放送している。

放送局派遣の人の場合、BBCとの契約は二、三年であるが、それ以外の人は、最初は四年三カ月の契約になる。外国人は英国で四年間働くと市民権を取得する権利を得られるので、亡命者もBBCに入れば、市民権は取得出来るようになる。私のいた頃は、ワールド・サービスでの外国人プロデューサーの契約更新は終身契約が多かったようである。だが、各言語が必要としているスタッフの数は限られており、小規模な部は十人以下であり、すでに終身契約のスタッフが在る以上、契約更新で終身雇用の契約を得るのは極めて難しかった。

ゲオルギ・マルコフ——ブルガリア前共産党政権批判勢力のシンボル

ブッシュ・ハウスでは、東側の反体制派の知識人は数多く働いていたが、その中では、ブルガリア語放送のスタッフであったゲオルギ・マルコフが最も有名であろう。マルコフはブルガリア時代は著名な劇作家・小説家であったが、一九六九年に西側に亡命。ロンドン移住後は、ワールド・サービスのブルガリア語放送のみならず、自由ヨーロッパやドイツの放送局のために働いていた。マルコフは放送の中で、ブルガリアの共産党政権を強く非難し、特に、当時

のトドル・ジフコフ国家評議会議長の政治を独裁的と厳しく批判した。マルコフの放送はブルガリアにおける反体制派の活動を鼓舞するものとみなされていた。一九七〇年代にジフコフ議長は国家評議会で、マルコフのラジオ放送を中止させたいと語ったと言われている。

一九七八年九月七日、マルコフはロンドンのウォータールー・ブリッジのバス停でバスを待っているとき、傘に仕込まれていた毒薬リチンを体内に打ち込まれ、死亡した。四十九歳であった。彼の死について調査した検視官は、マルコフは「非合法的に殺害された」との結論を出した。これはKGBとブルガリアの秘密警察の仕業であると広く信じられてきたが、犯人は不明であった。一九八九年の共産党政権崩壊後、ブルガリア内務省で大量の改造した傘が発見されている。

一九八九年晩秋、私はマルコフ関連番組制作のため、英国人の妻アナベル・マルコフ夫人を訪ねた。かつてBBCのスタッフであったアナベルは、ロンドン南郊クラッパムにある中産階級の多く住む住宅街に、二人の愛娘サーシャと住んでいた。アナベルは、マルコフが攻撃された九月七日はジフコフ議長の誕生日であり、二日後のブルガリア共産党政権樹立記念日にマルコフが死ぬことが企まれていたが、マルコフはそれよりは少し長く生き、殺害者の意向を挫いたと話した。九月十一日、マルコフは亡くなった。⁵⁶

一九八八年九月、マルコフの死後二十周年にあたり、当時のブルガリアのストヤノフ大統領はBBCに対し、マルコフの暗殺は前共産主義政権時代の最も暗い事件であると語った。そしてストヤノフ元大統領は、ブルガリアの元秘密警察が証拠を隠滅したとしても、ブルガリア当局はこの事件の捜査を続けると述べた。⁵⁷しかしマルコフの死に関するファイルは大量に処分され、また、それに関与した人は自殺していた。そして二〇〇〇年にブルガリアではこの事件の捜査は打ち切られたのである。

これは、英国で最も有名な未解決の殺人事件であったが、その容疑者が浮かび上がってきた。二〇〇五年五月六日

の『サンデー・タイムズ』によると、ブルガリアの日刊紙 (*Dnevnik*) が秘密警察のファイルの内容をリークし、マルコフ殺害の容疑者を割り出した。⁽⁵⁸⁾ ソフィア在住のジャーナリストが六年かけた調査で発見した書類によれば、共産党時代、ブルガリア秘密警察がイタリヤ生まれのデンマーク人エージェントに、マルコフ殺害を命じたという。これは、ジコフ議長が正式に許可した政治的暗殺の一つであった。⁽⁵⁹⁾ このリークを受けて、スコットランド・ヤードは「入手可能な新しい情報」を調査中であると発表した。⁽⁶⁰⁾ 今でもマルコフは、ブルガリア人にとっては前共産党政権を批判する人たちのシンボルであり続けている。

今後の行方

重点地域のシフト——東欧から中東へ

二〇〇七年からワールド・サービスはアラビア語テレビ放送を開始する予定であるが、これは、英国政府資金の国際放送としては初のテレビ放送である。必要な年間経費千九百万ポンド (三十八億円) 捻出のため、二〇〇六年三月までに、ブルガリア、チェコ、ハンガリー、ポーランド、クロアチア、スロバキア、スロベニア、ギリシア、カザフ、タイの各言語放送を終了した。

東欧語放送の多くは第二次世界大戦中に始まったが、戦後、冷戦構造が強まるにつれ、BBC放送はソ連とその衛星国家に対する「自由世界」のラジオになった。冷戦終結後、ユーゴスラビアでは、エスニシティーの対立から、分離独立運動や内戦が勃発するなど予断を許さない状況が続いた。クロアチアでの内戦終結から約十五年、ボスニア・ヘルツェゴビナの内戦終結から十年。旧ユーゴスラビアの状況は政治的に安定しているとみなされている。唯一深刻な問題が残っているのはコンボの将来で、昨年十一月、国連特使によるコンボの将来の地位を確定するための仲介活

動が開始された。今年、旧ユーゴスラビア向けのクロアチアとスロベニアの二言語の放送が終了した。⁽⁶¹⁾ BBCは、東欧の政治的安定、経済的繁栄、EU（欧州連合）加盟による国際情勢の変化を考慮し、さらに、多くの東欧諸国には独立した自由なメディアがあるとみなし、東欧語放送の多くはその使命を終えたと判断し、それらを閉鎖することにした。ロンドンのアラビア語新聞の編集者は、「心情の闘いは、二万八千六百万のアラビア語を話す人が目標になった」という。⁽⁶²⁾

BBCは外務省と提携関係があっても、編集権を握り、番組は政府からは「独立した専門家」によって伝えられている。しかし、外務省に財源と、最近までは、放送スケジュールを握られていたということから、BBCが完璧に客観的で独立しているのかは疑問であるという意見もある。⁽⁶³⁾

実際、英国政府と政治家は、ある地域の危機が去ると、当該地域の言語放送を閉鎖しようとする。ワールド・サーピスは長期間放送することで、確立し安定した評価——正確さと信頼——を聴取者の間に確立させてきた。平和時でも戦時でも、最も効果的なプロパガンダは正確さ、「客観性」と「真実」の上に築かれるものである。BBCが外務省の間接的な影響で、ある言語の放送を簡単に始めたり、中止したりするのは、BBCが英国のプロパガンダ装置であることを示すとして非難される。⁽⁶⁴⁾

今回の十言語放送の中止についても、該当地域に関係する一部の下院議員や外交官たちの中には、EUの新加入国の重要性が増す中、そうした国々への英国の影響力が弱まると予測する人もいる。実際に、東欧のラジオの聴取者の数は非常に減少してきている。人々はラジオよりテレビを視聴するようになっていくと指摘する人も多い。しかし、BBCの番組を再放送している多くの放送局が、BBCの閉鎖には困惑している。特に、非常に成功していたチェコやポーランドのような大きな部やタイ語放送の当惑は大きい。

クロアチア語部シニア・プロデューサーのジャルコ・ボディネリツクは今回の閉鎖について、次のように語ってい

る。「最新の調査によれば、クローチア語放送は地元のラジオ局の再放送を含めて、人口の約一二パーセントの人が聴いている。クローチアや東欧諸国のメディアは成長し、より洗練してきてはいるが、地元の言葉による高い質の報道をしてきたBBCの番組がなくなることは、メディア空間にポツカリとした穴があくことであり、淋しい」。

一方一九四一年に、放送開始したタイ語放送の聴取者たちは、積極的にタイ語放送の存続運動を行った。一九九二年のクーデターの際に見せたタイ語部ジャーナリストのような活躍は、タイ本国のマス・メディア環境ではほぼ不可能であると、放送終了に抗議する人が多くいた。⁽⁶⁵⁾ NGO関係者、元首相、現在の教育相、タイ上院外交委員会長、タイ外務省の上層部、そして多くの学者たちが積極的な反対運動を行った。タイではBBCタイ語放送の番組が地元の大学のFM放送で再放送されていることもあり、多くの大学がタイ語放送支援のためのセミナーを開いた。さらに、タイ語放送を支援するウェブサイトも開かれた。⁽⁶⁶⁾ BBCワールドの放送にはタイ語の訳はついておらず、人口の五パーセント以下の人たちが英語を話さないので、多くの人々はワールドの番組は理解できない。こうした聴取者たちの積極的な運動にもかかわらず、二〇〇六年一月十三日に、最後の放送が行われた。

アラビア語テレビ放送開始計画

BBCはかつて、アラビア語テレビ放送を試みたことがある。一九九四年に、サウジアラビアの衛星テレビ・オービットとBBCが合併でニュースチャンネルを開設したが、編集権をめぐる対立から、わずか十八カ月で中止になった。この放送局は放送開始直後から、BBCが訓練を行ったスタッフたちの専門性の高さと、独立した編集スタンスによって高い評価を得た。しかしオービットは、サウジ政権の圧制と贈賄に関する批判をしたことに憤り、放送を中止した。

一九九六年、アルジャジーラは、この失職した専門スタッフを雇用した。アルジャジーラは編集の自由を獲得し、

反対党、反体制人物が、初めて自らの見解を発表する場となり、アラビアにおける国家統制の放送独占は崩壊した。最近、アルジャジーラは、国際ニュース報道で評価を得ており、「アラビアのBBC」と呼ぶ人もいるほどである。⁽⁶⁷⁾

ワールドサービスのチャップマン局長は以前のアラビア語テレビ放送の失敗について、「放送に関する資金モデルとその手段が誤っていた」とし、「今回はBBC単独での進出であり、また編集権は、政府からの干渉を受けないという伝統を守る」という。消息筋はBBCが編集権は独立しているとはいえども、運営資金はすべて国費であり、今回の決定も政府による中東情報戦略としての判断ではないか、BBCが政府の国際戦略に利用されているという印象を海外の人々に与えるのではないかと複雑な反応をみせている。これに対しチャップマン局長は、「政府はこの決定に影響を与えていないし、外部からの圧力はない」とし、アルジャジーラなどのライバルの影響力の増大、衛星テレビに汎アラブ的にアクセスできることによって、BBCのラジオとオンラインは包囲網を築かれる可能性があると言っている。

アラビア語はワールド・サービスが一九三八年に、最初にラジオ放送した外国語である。アラビア世界のメディアの調査によれば、BBCアラビア語ラジオ放送は人気が高く、英国がイラク戦争に関与したにもかかわらず、週に千二百万人以上が定期的にBBCアラビア語放送を聴いている。二〇〇一年以降、アラビア語放送はニュース・分析・特集番組と英語教育番組などを二十四時間放送している。また一九九八年に、最初に外国語でウェブサイトを開いたのもアラビア語である。BOCArabia.com は二十四時間、ニュースと分析を掲載し、毎月千七百万人がオンラインニュースを読んでいる。

そして二〇〇七年、ワールド・サービスは、最初の外国語テレビ放送として、ロンドンとカイロに本拠地を置いてアラビア語テレビ放送を開始する。一日に十二時間で、将来は二十四時間放送にする予定だ。この地域の衛星放送視聴者の調査では、八〇―九〇パーセントの人がBBCのアラビア語テレビ放送を見るとみられている。

現在、百以上のアラビア語放送がすでに存在しているが、国家の統制を受けているか、または、視聴者に放送内容が信じられていない。彼らの放送のプロトとしての質は非常に貧弱とみなされている。唯一の例外がアルジャジーラで、五千万人が見ている。アルジャジーラは二〇〇六年三月から、英語ニュースチャンネルを開局する予定である。新しい英語のイスラム系ニュースチャンネルがサウジアラビアで準備中である。またアメリカはアラビア語のラジオ・テレビ放送を行っている。ドイツもドイチュエベレ・テレビで一日三時間のアラビア語放送を始めている。そしてフランスも二〇〇六年末までに、新たに国際情報チャンネルを開局し、アラビア語放送も行う予定である。

アルジャジーラ、アルアラビアのスポークスマンたちは、BBCアラビア語テレビ放送は中東衛星テレビ局にとっても強敵となるが、競争の激化は健全であると語る。⁽⁶⁸⁾ またロンドン発行のアラビア語新聞(Al-Naba)の編集者は、新しいBBCのアラビア語テレビ放送とともに、こうした新放送局が、対話、討論、自由な言論の新時代に、この地域における民主主義と本物の政治的改革へ向けての先導役になるとの期待もある、という。⁽⁶⁹⁾

「国際公共放送」を目指して——「ワールド・アイランド」の放送局として

ワールド・サービスは、短波ラジオ放送から主要な国際的なマルチメディア・ネットワークに変身しようとしている。ワールド・サービス・ラジオはインターネットでも聴取可能であるし、ニュースや番組をMP3に録音することも可能である。そしてオンラインには、二〇〇五年三月までの一年間で、全世界から年間三億二千四百万ページのアクセスがあった。⁽⁷⁰⁾ 公共財源で賄われているオンラインのニュース報道が国外で自由に入手可能なので、これは公正貿易に反するとの不満が上がっている。BBCはニュースのウェブサイトを国内用と海外用の二つ作り、英国外のユーザーが閲覧すると、その国際版の周辺のなコストはワールド・サービスの財源から賄われるようになっていく。

ワールド・サービスはワールド(国際テレビ放送)、オンラインサービスを結んで、「地球的会話」を行いたいとし

ている。新しい相互交換のサービスをすることで、より多くの人々が世界の出来事にコメントしたり貢献したり出来るようにするという。距離、言語、文化によって分断されている社会間のコミュニケーションに役立ちたいと考えている。今日の問題をラジオ、テレビ、オンラインで世界的に討論する新しい形の番組「トーキング・ポイント」も放送されている。こうした「情報―教育」という放送のあり方は、ハーバードの公共圏のあり方であり、放送の民主主義的目的の狭いモデルを採用しているといえよう。また、ニュース流通のグローバル化に伴う「理想主義的報道枠組み」⁽⁷³⁾が見られる。即ち、グローバルな人類共通の問題の解決を求める世論の形成に貢献しようという意欲が感じられる。

ワールド・サービスをどの程度、「外交の道具」といえるのか、また「文化帝国主義」「メディア帝国主義」、グローバルゼーションとメディア、新技術とメディアなどとの関連から、考察すべき点は多くあるが、それは今後の課題にしたい。

ワールド・サービスの国際社会における情報・文化活動は「英国から世界への最高の贈物」(アナン国連事務総長)である。贈物とは、人類学的にいえば、与え手は与えることでプレステージを高める一方で、受け手は贈り物を受けることで道徳的義理を感じ、返礼をしなければならないと思う。⁽⁷⁵⁾今、BBCは、こうした活動を通じて、商業的に、グローバルなモデルになり、英国の影響を強化している。二十一世紀初頭のコスモポリタンな英国は「ワールド・アイルランド」であるが、それは、頑固に島国でありながら、冷酷な国際主義者ということである⁽⁷⁶⁾。BBCワールド・サービスの活動は政府の意向も国民の価値観・世界観・期待も反映しているといえよう。

注

(1) 荻葉信弘『BBCイギリス放送協会』東信堂、二〇〇二年、二二四頁。

(2) http://www.bbc.co.uk/pressoffice/keyfacts/stories/ws2004_shm1

- (3) Michael Grade, "The Global Cornerstone", in: *BBC Annual Report 2004-05*.
- (4) 特許状 (Royal Charter) とは、元々は、君主が法人団体・植民地・自治都市・組合・会社などに与える特権や創設の条件などを明示した文書である。一九二七年から十年の期限で発行された第一次特許状で、ジョージ五世がBBCの法人としての設立を認め、その目的、権限、責務を定めた。現在は、第七次特許状で、今年末に期限が切れる。なお商業放送は議会制定法(放送法)の制約があるが、BBCは伝統的に特殊な地位が与えられている。
- (5) Jean Seaton, "Broadcasting History", in: James Curran & Jean Seaton, *Power without Responsibility: the Press, Broadcasting, and New Media in Britain*, 6th ed., London/ New York: Routledge 2003, p. 110.
- (6) Georgia Born, *Uncertain Vision: Birt, Dyke, and the Reformation of the BBC*, London: Secker & Warburg 2004, p. 27.
- (7) 葉業前掲書、八頁。
- (8) Anthony Smith, "Licensees and Liberty: Public Service Broadcasting in Britain", in: Colin MacCabe & Olivia Stewart (Eds.), *The BBC and Public Service Broadcasting*, Oxford: Manchester UP 1986, p. 8
- (9) Seaton, *op. cit.*, p. 110.
- (10) Born, *op. cit.*, p. 7.
- (11) *ibid.*, p. 27.
- (12) Seaton, *op. cit.*, p. 118.
- (13) 津田正太郎「マス・メディアと国民統合——戦間期イギリスの国民統合におけるBBCラジオの役割」『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』五三号、二〇〇三年。Born, *op. cit.*, pp. 31-33.
- (14) Seaton, *op. cit.*, p. 117
- (15) Anthony Smith, *op. cit.*
- (16) Andrew Crisell, *An Introductory History of British Broadcasting*, 2nd ed., London/ New York: Routledge 2002, p. 28.
- (17) William Maley "Centralisation and Censorship", in: MacCabe & Stewart (Eds.), *op. cit.*, pp. 34-35.
- (18) 大藏雄之助『こちらロンドンBBC』サイマル出版会、一九八三年、五八頁。
- (19) 同上書、六一頁。
- (20) Tom Hickam, *What Did You Do in the War, Auntie?*, London: BBC Worldwide Publishing 1995, p. 122.
- (21) *ibid.*, p. 127.
- (22) *ibid.*, p. 127.
- (23) *ibid.*, p. 105.

- (24) ジョージ・オーウェル、W・J・ウエスト編、甲斐弦・三澤佳子・奥山康治訳『戦争とラジオ BBC時代』晶文社、一九九四年、二七、五三〇頁。
- (25) Born, *op. cit.*, p. 33.
- (26) Meltem Ahiska, "An Occidentalizer Fantasy: Turkish Radio and National Identity", Ch.4, Unpublished Ph.D. thesis, Goldsmiths College, University of London 1999.
- (27) Born, *op. cit.*, p. 34.
- (28) Anthony Smith, *op. cit.*, p. 8.
- (29) 中南米—ポルトガル、スペイン。欧州—アルバニア、マケドニア、ルーマニア、ロシア、セルビア、トルコ、ウクライナ。アフリカ—アラビア、フランス、ハウサ、キニアルワンダ(主としてルワンダ他、コンゴ東部・ウガンダ南部で使用)、ケルンジ(ブルンジの言語)、ポルトガル、ソマリ、スワヒリ。中東—アラビア、パシウトウー、ペルシア、トルコ。中央アジア—アゼルバイジャン、キルギス、ウズベク。南アジア—ベンガリ、ヒンディー、ネパール、シンハリ、タミル、ウルドゥー。アジア—太平洋—ビルマ、中国、広東、インドネシア、ベトナム。その他、元英領のカリブ海諸島向けの英語放送もある(ポルトガル語は中南米とアフリカ向けに、トルコ語は欧州と中東向けに、またアラビア語はアフリカと中東向けに放送されているが、言語としてはそれぞれ一言語と数えられる)。
- (30) Gray D. Rawnsley, *Radio Diplomacy and Propaganda: The BBC and IOA in International Politics, 1956-67*, Hampshire / London: Macmillan Press 1996, p. 166. ローンズリーは、国際ラジオ放送は外交手段にもなるとし、次のように主張する。情報を対象国の国民に伝えるその国民の間に、外交政策における世論を形成し、国民に行動を起こさせることができる。そして、国家の政策決定、行動、地位に関する好意的なイメージを、広い世界の人々に伝えるのに使われている。この場合、「民主主義」「正義」「合法」という言葉がよく使われる。したがって、国際ラジオ放送は外交政策の形成、実行、予想に関係しているといえる。多くの外交的コミュニケーションは、主として、意見交換、意図を明確にし、厳しい取引や脅威を与えずに、説得することである (*ibid.*, pp. 170-74)。
- (31) *ibid.*, p. 178.
- (32) *ibid.*, p. 208.
- (33) *ibid.*, p. 177.
- (34) John Tusa, *A World in Your Ear*. London: Broadside 1992, p. 18.
- (35) Born, *op. cit.*, p. 314.
- (36) Nigel Chapman, "Rising to the Challenge", *BBC Annual Report 2004-05*, 二〇〇四年、チャップマン局長は首都カブールで、老人がタリバン時代を振り返り、「(BBCは)世界に関する私たちの学校であり、大学でした。……私たちに、アフガニスタンのニュースと

- 情報を教え続けてくれ、アフガニスタンの人々のお互いの存在を教えてください」と感謝されたという。
- (37) Rawnsley, *op. cit.*, p. 174.
- (38) しかし、中国にいる人々は BBCChinese.com を代理のサーバーを通して読むことができる。皮肉なことに中国では CNN.com にアクセスできない。BBC のウェブサイトに、簡単にアクセスできないこともある。
- (39) Born, *op. cit.*, p. 79.
- (40) Timothy Garton Ash, “The Janus Dilemma”, *The Guardian*, June 5, 2004, pp. 3, 5.
- (41) John Kampner, “The Callow Youths Have Had Their Day in the Sun”, *Media Guardian*, November 5, 2001.
- (41 a) “Guidance on the Use of Language: When Reporting Terrorism”, p. 4.
<http://www.bbc.co.uk/guidelines/editorialguidelines/assets/advise/guidanceonlanguagewhenreportingterrorism.doc>
- (42) 二〇〇五年一月一八日東京ブリテイッシュ・カウンシルにおける講演会。
- (43) Maley, *op. cit.*, p. 34.
- (44) *ibid.*, p. 34.
- (45) アラン・ベタフアーレン、田口俊樹訳『リリーへの手紙』ソフトバンク・クリエイティブ、二〇〇五年、一一五頁。
- (46) Born, *op. cit.*, p. 381.
- (47) Gaye Tuchman, “Objectivity as Strategic Ritual: An Examination of Newsmen’s Notions of Objectivity”, *American Journal of Sociology*, vol. 77 No. 4, 1972; Judith Lichtenberg, “In Defence of Objectivity Revisited”, in: James Curran & Michael Gurevitch (Eds.), *Mass Media and Society*, 3rd ed, London: Arnold 2000, pp. 238-54.
- (48) Born, *op. cit.*, p. 381.
- (49) *ibid.*, p. 78.
- (50) *ibid.*, p. 379.
- (51) *ibid.*, p. 78.
- (52) 二〇〇六年一月二十一日、BBC 東京オフィスでのインタビュー。
- (53) Jeremy Paxman, *Friend in High Places: Who Runs Britain?* London: Penguin Books 1991, p. 183
- (54) Born, *op. cit.*, p. 197.
- (55) Nigel Chapman, *BBC Annual Report and Accounts 1989-99*, London: BBC 1999, p. 63.
- (56) Esther Addley, “Murder Mystery”, *The Guardian*, January 9, 2003. <http://www.guardian.co.uk/g2/story/0,871108,00.html>
- (57) “Markov Murder ‘Bulgaria’s Darkest Hour’”, *The Guardian* Onlinenews, September 7, 1998.

- (58) Jack Hamilton & Tom Walker, "Home News", *The Sunday Times*, June 5, 2005.
- (59) *ibid.*
- (60) Michael Evans, "Home News", *The Times*, June 6, 2005.
- (61) 第二次世界大戦勃発直前から、BBCはスロベニア語とセルボ・クロアチア語でユーゴスラビアへの短波放送を始めた。「セルボ・クロアチア語」というのは当時の呼び方で、セルビアとクロアチアの言葉が似ていたので、セルビアとクロアチアのプロデューサーは一緒に仕事をした。目的は、この地域のナチスと地元の協力政権のプロバガンダに対抗するためであった。ユーゴスラビアの崩壊はBBCのこの地域への放送にも影響を与えた。セルビアとクロアチアのプロデューサーは別々に仕事をするようになったのである。クロアチアとセルビアが二つの国に分離する時、地元の人たちは非常に言葉について敏感で、セルボ・クロアチアのコンセプトを放棄すると決意した。BBCは信頼性を維持するため、この事態に合わせざるをえなかった。そして、スロベニア語放送が拡大された。その数年前に、マケドニア語とアルバニア語の放送が、その地域の政治的現実を反映するために形成された。ボスニア語放送は一度も創設されなかった。ボスニア・ヘルツェゴビナは三つのエスニシティー（ボスニア・ムスリム、セルビア、クロアチア）と、各々の共通語と宗教（ムスリム、正教会、カトリック）からなる複雑な国である。クロアチア語のシニアプロデューサー、ボデイネリックは、「ボスニア語放送不成立の理由はこれらの差異が政治的に地雷原になると判断したからであろう」と語る。代わりに、セルビアとクロアチア語部がその地域向けの特別番組を作り、地元の放送局がそれを再放送していた。
- (62) Abdel Bari Atwan, "The Battle for Hearts and Minds", *The Guardian*, October 25, 2005. <http://media.guardian.co.uk/broadcast/story/0,7493,1600394,00.html>
- (63) *cf.* Ramsley *op. cit.*, p. 166.
- (64) *cf. ibid.*, p. 170.
- (65) タイでは、一九九一年のクーデター後の民政移管のため、九二年三月に総選挙が行われた。しかしスチンダ前国軍最高司令官が首相に横滑りしたため、バンコクでは軍人政府に反対する国民の大規模なデモが繰り返されていた。五月十七日の夜から、市民や学生らのデモ隊と軍と警察が衝突、軍がデモ隊に発砲し、流血の事態を招いた。翌日、スチンダ首相（当時）はバンコクとその周辺に非常事態宣言を発令し、反政府運動のリーダーであったチャムロン道義党党首を逮捕するなど弾圧を強化していた。
- 二〇〇六年三月までタイ語部長を務めたソムチャイ・スワンボンによれば、BBCタイ語放送は、当時のスチンダ首相にインタビュをした最初で唯一のメディアであった。「首相は、私たちのインタビュの中で、チャムロン道義党党首と国王に会いに行くと話した。私たちの放送後、軍が駐屯地へ戻り始め、プミポン国王の言葉を聞くために、街頭での戦いは中止したように見えた。国王が二人に助言を与えているシーンのビデオがテレビで放映され、状況は平常化した。私は、BBCはタイの人々がお互いに殺しあうのを止めるという役割をしたと信じている」と述べている。

- (66) www.iloveBBCchat.com: www.petitionOnline.com.
- (67) Brian Whistaker, "Battle Station", *The Guardian Supplement*, October 9, 2005.
- (68) Owen Gibson, "BBC Goes Head-to-head with al-Jazeera", *The Guardian*, October 26, 2005.
- (69) Abdel Bari Atwan, "The Battle for Hearts and Minds", *The Guardian*, October 25, 2005. <http://media.guardian.co.uk/broadcasts/story/0,7493,1600394,00.html>
- (70) Nigel Chapman, "Rising to the Challenge", *BBC Annual Report 2004-05*.
- (71) Michael Grade, "The Global Cornerstone", *BBC Annual Report 2004-05*.
- (72) ユルゲン・ハーバーマス、細谷貞雄訳『公共性の構造転換』未来社、一九七三年。ユルゲン・ハーバーマス、藤沢賢一郎他訳『コミュニケーション的行為の理論 中巻』未来社、一九八六年。ユルゲン・ハーバーマス、丸山高司他訳『コミュニケーション的行為の理論 下巻』未来社、一九八七年。
- (73) 鶴木真「マスメディアの国際環境監視機能と報道枠組み」『マス・コミュニケーション研究』五五号、一九九九年、一〇四―一〇六頁。
- (74) ジョン・トムリンソン、片岡信訳『文化帝国主義』青土社、一九九三年。
- (75) Born, *op. cit.*, p. 510.
- (76) Timothy Garton Ash, "The Janus Dilemma", *The Guardian*, June 5, 2004, pp. 3, 5.

筆者は一般外国語教育センター非常勤講師（社会人類学専攻）